

イラストストーリー

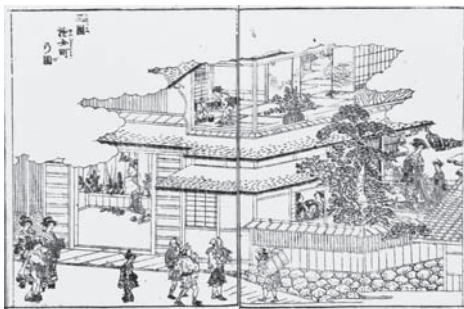
「けいせい仏の原」ほとけ

『けいせい仏の原』は、越前三国の遊廓を舞台にしたお家騒動物で、近松の書いた歌舞伎作品の中でも最高傑作のひとつです。

ストーリーを、絵物語にしました。

●第一（北国街道筋く梅永刑部館門前くさる大名の下屋敷）
ほっこくかいどうすじ うめながぎょうぶやかたもんぜん

越前・三国の遊廓玉屋の傾城（遊女）
えちぜんみくにに
今川は、越前の国主梅永刑部の息子文蔵
いまがわ ぶんぞう
を愛し、二人のあいだに子ども藤松までも
ふじまつ



三国遊女町の図（『二十四輩順拝図会より』）

うけていました。今川の父乾介^{いぬいすけだゆう}太夫は、北国街道で偶然娘と再会し、「ある大名家に召し抱えられたので、今にそなたを身請けする」と約束をします。

鷹狩から帰った文蔵は、文蔵の許婚竹姫^{いいなすけ}の家に来になりました介太夫から、文蔵の弟帯刀^{たてわき}に、米二千石の借りがあるといわれます。しかもこの二千石は、文蔵の遊廓で使った費用だということです。このため文蔵は、父刑部から「阿呆払い」（勘当）にされます。ところが、実は帯刀が兄を追ひ払うために、介太夫を使って仕組んだことでした。



追い出された文蔵は、「紙衣^{かみこ}」という
粗末な紙の着物姿で、三国の月窓寺^{げつそうじ}へ向
かいますが、ある大名屋敷の前まで来る
と、昔好きだった遊女奥州^{おうしゅう}が作った歌を
耳にします。思わず屋敷に忍び込んだ文
蔵は、二人の遊女——奥州と今川にまつ
わる遊郭での大騒動や、遊びが過ぎて落



ちぶれたいきさつを、おもしろおかしく
腰元たちに聞かせます。この長い身の上
話のあいだ、座敷の暗がりで、涙ながら
に話を聞いていた奥州が姿を見せ、文蔵
と酒を酌み交わします。そこへ文蔵の許
婚である竹姫がやってきて、嫉妬心から、
魂が火の玉となって舞い上がり、奥州に
乗り移ったとみるや、その身体を借りて、
文蔵に激しくうらみごとを訴えます。



帯刀と介太夫も、文蔵を追ってきて切りあいになり、奥州の機転で、文蔵は難を逃れますが、介太夫らは国主刑部をその場に連れ込み殺してしまいます。駆けつけた家老の望月八郎左衛門は、竹姫らを助け落ちのびます。

●第二（三国揚屋柏屋内へ介太夫屋敷内）

虚無僧姿の文蔵は、三国の揚屋柏屋で、今川と再会します。今川が遊女として売られたときの年季手形に、「乾介太夫」の名が書かれてあったことから、父を惨殺した敵が、今川の実父介太夫であることを知った文蔵。一同にこのなりゆきを話し、「今川にはひまをや



った。自分が親の敵介太夫を討てば、うれしくなろう」と、今川に息子の藤松を預け、月窓寺を頼っていくように言いおいて、泣く泣く別れます。

介太夫の住居に、何者かが「火付けをする」と書いた札を張ります。夜になり、介太夫が見張りをしていると、そこに今川と藤松が訪れます。今川は、父が文蔵に



討たれないように、火の札で父を逃がそうとしていたのです。しかし、暗闇のため、それとは知らず藤松に切りつける介太夫。そこへ、文蔵と八郎左衛門が現れ、切り合いになります。今川が両者のあいだに入って、介太夫に、恋人が文蔵であることを話すと、介太夫は驚き、これまでの悪事の数々をわび、その場に姿を見せた帯刀をだまして討ち取らせます。

その上で、文蔵に親の敵

として討たれようとする介太

夫を、文蔵は刀で切りつけ

「サア敵は討った」と叫びま

す。が、それは峰打ちでした。

一同は、文蔵の機転に喜びの声をあげます。

●第三（月窓寺如来東山開帳の場）

月窓寺の住職は都に上り、寺の宝物である沓

はきの阿弥陀如来を、東山長楽寺で公開しま

す。竹姫、奥州、今川が供養の音楽を奏でる

と、大勢の人が参拝に訪れ、めでたく治まった

世を祝うのです。



歌舞伎

「けいせい仙の原」

◎初演 元禄十二（一六九九年）一月二十四日 京都四条大芝居

見どころ

元禄時代の三国は、北前船の寄港地として、多くの船人でにぎわっていました。このため遊廓などの遊び場も栄えていました。この作品は、その三国の遊廓を主な舞台として書かれた歌舞伎です。初演当時、主役の文蔵に扮した名優坂田藤十郎が、長々と身の上話をする場面が有名でした（第二「さる大名の下屋敷」）。良家の跡取り息子が、遊女に心を奪われ、家を追われて落ちぶれます。この後、遊女のところで長々とおしゃべりをするという話の展開を「やつし」と呼びます。このやつ

しの芸が、当時の上方歌舞伎の典型的な筋書きでした。近松座を主宰する人間国宝の歌舞伎役者・中村鴈治郎氏が、一九八七年、この作品を復活上演しました。藤十郎が得意にした、このやつしの見せ場を、見事に現代によみがえらせた。

